

先日、オープンした企画展「これからの写真」。9名の出展作家による力の入った個展形式の展示となっています。個々の作品については、会場のパネルやカタログ等でお話しているので、ブログでは、コラム的なお話をしていきたいと思います。

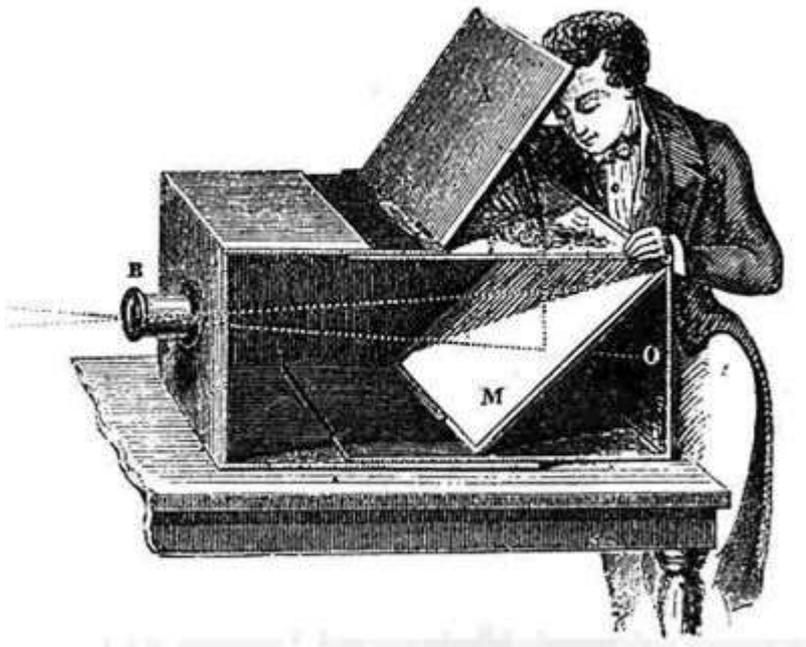
さて、「これからの写真」と銘打ちながら、実は、過去の写真技法に関する作品も少なくはない本展覧会。今回は前編と後編に分けて、それら紙にプリントされる以前の写真について振り返ってみましょう。

まずは、田村友一郎の茶室型の作品のモチーフともなっている「カメラ・オブスキュラ」についてご説明しましょう。

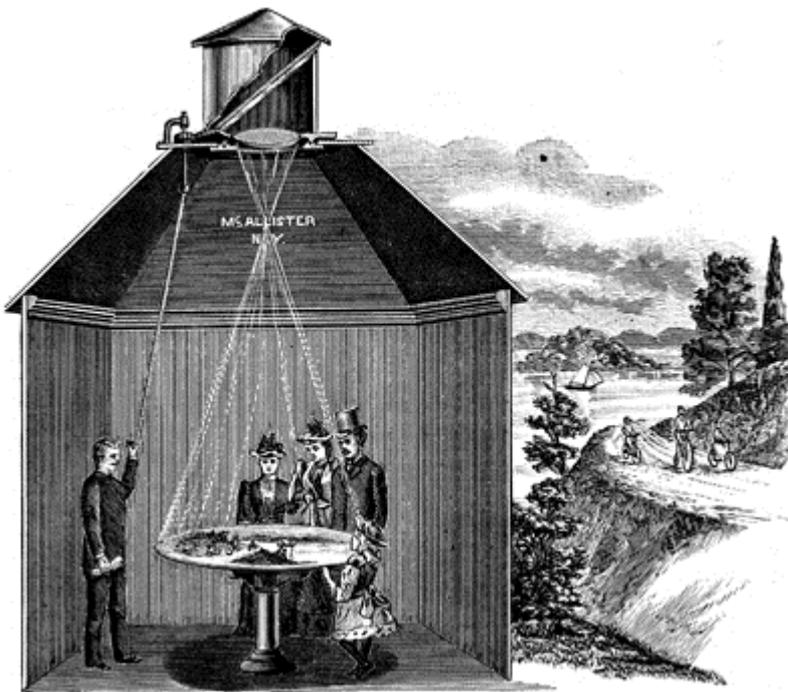


↑田村友一郎《T氏の部屋》。T氏とは今回のモチーフである徳川慶勝の名字のTであり、田村のTであり、さらに英語にするとT's Roomとなって茶室（Tea Room）とダジャレになっているという・・・。

カメラ・オブスキュラは、小さな穴から暗い箱に光が差し込むと、外側の風景が逆さまになって映る仕組みを利用した視覚装置です。この仕組みは、写真技術が誕生するはるか昔の紀元前には発見されていましたが、ルネサンス期に改良されて広まったそうです。このカメラ・オブスキュラがカメラの原型になったと言われています。



↑こちらが携帯用のカメラ・オブスキュラ。画家はカメラ・オブスキュラに現れるイメージをなぞって描きました。手でなぞって描く代わりに、感光によって像を焼き付けようとしたのが写真の始まりです。



一方、大きなカメラ・オブスキュラの場合、箱の中に人が入って風景を楽しむことができました。エンターテイメントとして人気があったようです。

今回、田村友一郎の制作した茶室も、人が入室できるタイプのカメラ・オブスキュラを彷彿させる作りとなっています。

なお、国内だとなんと東京ディズニー・シーの火山のふもとに人が入れる大型のカメラ・オブスキュラがあります。しかし、東京ディズニー・シーで「なるほど、レンズをはめ込んでカメラ・オブスキュラに写る像を明るくしたのはルネサンス期のミラノの数学者、カルダノと言われているので、それが大航海時代をテーマの一つにしたこのテーマパークに設置されているのは合点が行くね。ところで大航海時代とカメラ・オブスキュラと言えば、当然、フェルメールが想起されるわけだが云々」と語り始めると、絶対、モテません！

(F. N.)